



撮影・川崎公太

「分身ロボ」を開発した

吉藤 健太朗さん 29

よしふじ けんたろう
吉藤 健太郎さん 29

男の子が、高さ20センチほどの小さなロボットとうれしそうに言葉を交わす。上半身だけのロボットはうなずいたり、拍手したり、愛嬌たっぷりだ。入院中の母親がスマートフォンで息子を見ながら操り、会話する。スマホやパソコンで簡単に遠隔操作できる小型ロボ

「お母さんが、本当に家にいるみたい」。小学生の男の子が、高さ20センチほどの小さなロボットとうれしそうに言葉を交わす。上半身だけのロボットはうなずいたり、拍手したり、愛嬌たっぷりだ。入院中の母親がスマートフォンで息子を見ながら操り、会話する。

顔

小5から3年半、ひきこもりで「孤独」のつらさを知った。孤独に苦しむ人の手助けをしたいと、大学時代、「存在を伝え、体験を共有できるロボット」を作った。織姫が離れた彦星と年1回会

（リヒメ）」だ。「行きたいところに行けない人の『分身』。周りの人認識してもらえるもう一つの体です」と作った理由を熱く語る。

う七夕伝説にちなみ、オリヒメと名付けた。

難病患者や高齢者などに幅広く使ってもらおうと会社を設立、昨年7月から本

格的にレンタルしている。3月には開発の経緯を記した著書を出版した。

「孤独の解消には社会への参加が欠かせない」が持論。自力で移動できて、生活にとけ込みやすいタイプの開発も目指している。

（経済部 佐俣勝敏）